HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第84/85号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Description	事務局: 北海道大学附属図書館 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
Issue Date	2017-02-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73651
Type	journal
File Information	DRFmonthly_84-85.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

月刊 DRF
Digital Repository Federation Monthly

第84/85号
No. 84/85 February, 2017

【 報　告 】DRFオンラインワークショップ開催報告
【レポート1】JPCOAR地域ワークショップ（中国四国地区）
【レポート2】ライブラリーサイエンス専攻シンポジウム
「オープンデータとデジタルヒューマニティーズ」(九州大学)
【 連　載 】かたつむりとオープンアクセスの日常 第21回

報告

平成28年度 DRFオンラインワークショップ 「第2回 研究データから研究プロセスを知る」開催報告

DRF企画WG 中谷 昇（鳥取大学）

▼ 各グループの分野とインタビューした研究者の専攻

自然科学系	地球科学
	統計物理学
	プラズマ物理学
	有機合成化学
人文社会学系	考古学
	家政学
	マーケティング
	文献言語学
	宗教学
	ペルシア文学
生命科学系	病態解析学
	保健医学
	神経生物学
理工・情報科学系	超伝導物理学
	水工水理学
	コンピュータサイエンス

今年度もまた、数か月にわたるオンラインワークショップを開催しました！　今回の「第2回 研究データから研究プロセスを知る」では、前年度の内容を引き継ぎ、研究者へのヒアリング調査を中心としたワークを実施しました。

ワークの主軸として、(1)インタビュー項目の設定、(2)インタビューの実施、(3)インタビュー結果の事例集の作成の3つを設定し、ご参加いただいた8機関13名の方々を4つのグループに分けて、それぞれ自然科学系、人文社会系、生命科学系、理工・情報科学系の研究者へのインタビューを行っていただきました。

今回は、合計16名の研究者へのインタビューが実施され、それぞれグループごとに結果がまとめられました。インタビューは、研究者の研究内容や研究で用いる研究データなどに関する質問が主でしたが、それに対する回答は、同じグループ（分野）の中でも研究者ごとに様々でした。研究データひとつをとってみても、紙媒体、音声・動画、標本、観測データなど多岐にわたり、ただ一言に「研究データ」、「オープンサイエンス」などと表現するだけではわからない、多様な観点が内包されていました。

今回の成果物であるインタビュー結果事例集も、DRF-Wikiにて公開中です。前回の内容を踏襲して実施した今回のワークショップでしたが、同じ結果となったインタビューはひとつとしてなく、どちらも通してみると、各所で聞く「オープンサイエンスは全てがケースバイケース」という言葉がより具体性を持って感じられました。ぜひ、どちらもご覧いただき、単にインタビューの事例というだけでなく、それら一つひとつのケースに臨むための参考としていただければと思います。

▶ インタビュー結果事例集　http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?onlineworkshop2016

レポート1

JPCOAR地域ワークショップ（中国四国地区）

DRF企画WG 川村 拓郎（広島大学）

2016年12月2日、広島大学東広島キャンパスにて、オープンアクセスリポジトリ推進協会(JPCOAR)主催「JPCOAR地域ワークショップ(中国四国地区)」が開催されました。登壇者も含め約50名が参加した、このJPCOARとしては初の試みとなる地域でのアウトリーチ活動についてレポートをします。

ワークショップでは、これからの機関リポジトリコミュニティに関する話題として以下のようなプログラムがありました。

- **機関リポジトリ推進委員会WG/TF報告**
  川村 拓郎（広島大学）
- **今後のリポジトリコミュニティに期待すること**
  中谷 昇氏（鳥取大学）
- **JPCOARの紹介と今後の活動に関する意見交換（パネルディスカッション）**
  富田 健市氏
  (機関リポジトリ推進委員会委員長、北海道大学)
  山﨑 勝義氏(広島大学) / 鈴木 雅子氏(静岡大学)
  尾崎 文代氏(鳥取大学)

機関リポジトリ推進委員会(IRPC)の活動は、実質的にJPCOARに引き継がれていくことが予想されるため、私(川村)からはIRPCの協力員の立場より2016年の図書館総合展で開催された「リポジトリの未来を考える：オープンサイエンス時代の到来を迎えて」のIRPC活動報告の内容に基づき報告を行いました。総合展の発表資料はIRPCのWebページで公開されていますので興味のある方はご覧ください。

中谷昇氏からは、DRF 、JAIRO Cloudコミュニティ、共同リポジトリなどの各地域コミュニティなど、これまでの機関リポジトリ関連コミュニティについて概観したのち、今現在、一部においてはコミュニティとしてはうまく機能していないのではないか、という提起がありました。その上で、新しいコミュニティはメンバーの誰もが参画・行動しやすいものとなることを期待するというメッセージがありました。

パネルディスカッションでは現在JPCOARの運営委員を兼ねているIRPC委員長の富田健市氏によるJPCOARの紹介に続いて、意見交換が行われました。

「現在のIRPCの体制では研修など一つとっても人員が足りているとは言えないことからも、皆が参加できる新たなコミュニティが必要」「JPCOARは過去最大規模のコミュニティとなるため、今までの団体以上に参加の敷居が上がってしまう可能性もある。その点では、今回のワークショップのように地域での顔が見える活動も重要ではないか」などの意見が交わされました。

▲会場の様子

また、本レポートでは詳しくは触れませんが、ワークショップではコミュニティに関するプログラムの他にも、以下のようなプラクティカルな発表もありました。

- **研究者の視点からリポジトリに期待(感謝)すること**
  山﨑 勝義氏（広島大学）
- **オープンアクセス方針の採択状況：徳島大学の事例**
  山本　豪氏（徳島大学）
- **博士論文と著作権に関する話題**
  尾崎 史郎氏（福山平成大学）

ほとんど全ての機関でリソース不足が叫ばれる昨今の状況において、継続的にリポジトリや関連する諸課題に取り組み、ひいては、これからの科学の営みに寄与していくためには、各担当者の知恵や疑問の共有は欠かせません。その点において、 JPCOARは非常に大きな可能性を秘めていると感じました。そして、「可能性」だけでは終わらせないためにも、加入機関の実際の行動が重要になってくるのでしょう。

当日の発表資料はJPCOARのWebページで公開されているようじゃぞ！
https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/?page_id=49#_href_86

レポート 2

ライブラリーサイエンス専攻シンポジウム「オープンデータとデジタルヒューマニティーズ」(九州大学)

１月18日、九州大学箱崎キャンパスにて、九州大学ライブラリーサイエンス専攻シンポジウム「オープンデータとデジタルヒューマニティーズ」が開催されました。研究データのオープン化という潮流を受けて、人文科学系のデジタルヒューマニティーズにおけるオープンデータ、またデータに関する専門家の養成について報告・議論されました。

DRF企画WG 川村 拓郎（広島大学）

講演：米国の大学を中心としたオープンデータの現状：訪問調査から

畑埜 晃平 氏 (九州大学)

オープンデータに関する米国への訪問調査について、システム基盤・人的支援の側面より報告がありました。システム基盤としては、ハーバード大学で開発されているオープンソースのデータリポジトリDataverse[1]のほか、カリフォルニア大学デジタルライブラリ、イリノイ大学アーバナシャンペーン校(以下、本レポート中では単にイリノイ大学と表記します)の事例について紹介されました。いずれも独自の開発チームによる持続的な開発体制を取っており、このモデルを日本国内に当てはめるには大きな覚悟が必要であるとのことで、共用リポジトリの構築といった方向性も提案されました。人的支援に関しては、研究者が登録したデータのメタデータチェック、メタデータの設計、ワークショップの開催、データ管理計画の作成支援などが行なわれているようです。

講演：Creating Open Data for New Scholarship: HathiTrust Research Center Case

J. Stephen Downie 氏 (イリノイ大学)

HathiTrust[2]の研究部門であるHathiTrustリサーチセンターが行っているデータ利活用の仕組みとそれらを利活用した実際の研究について紹介がありました。センターでは、米国の著作権法を侵害せずにデータを研究に利活用していくために、いわゆる非消費的（non-consumptive）研究などが行える環境やデータセットを提供しているそうです。

講演：データキュレーションへの期待と課題：自然科学から人文科学まで

北本 朝展 氏 (国立情報学研究所)

人文学オープンデータ共同利用センター（CODH）[3]や国内の自然科学系のオープンデータ・データキュレーションの取り組みの紹介、またそれらの知見などに基づいたデータ専門家に関する考えについてお話をされました。CODHの事例では、江戸料理レシピデータセット[4]を例にとり、理解・利用をしやすい形で、適切なプラットフォームで公開することがデータセットのインパクト向上には有用となるというお話が印象的でした。さらに、DIASにおける事例[5]や図書館員の取り組み[6]なども参照しつつデータ専門職の姿を明らかにしていきました。

---

[1] http://dataverse.org/

[2] 簡単にいうと本を電子化、保存をしてメンバー館などに配信を行う米国を中心としたコンソーシアム的な組織。日本語での解説については次の文献などが詳しい。http://doi.org/10.1241/johokanri.57.548

[3]厳密には現在は"準備室"。2017年4月1日に正式発足予定。Webページは次のURL http://codh.rois.ac.jp

[4]http://codh.rois.ac.jp/edo-cooking/

[5]https://japanlinkcenter.org/top/doc/150227_4_kitamoto.pdf

[6] 第2回SPARC Japanセミナー2016 (http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2016/20161026.html)の超高層大気観測データのメタデータ作成実験経過報告(南山泰之氏)

講演： Training Information Professionals for the Emerging Data Ecosystem

Melissa Cragin氏 (イリノイ大学)

最近10年ほどのイリノイ大学School of Information Sciences (iSchool)における情報専門家の育成プログラムの内容や取り組みについて紹介がありました。筆者の不勉強により、詳しく理解はできませんでしたが、データキュレーションやデジタル保存に関する科目のほかにも、リサーチセンターなどでのインターンシップといった実践的トレーニングも行っているようです。

パネルディスカッション「日本におけるオープンデータの促進とデータキュレーターの育成」

1. オープンデータを推進(実践)するために、研究者に対してどのような支援が必要か
2. そのような支援を行う人材にはどのようなスキル、知識が必要か
3. そのような人材養成をするにはどのようなプログラムが必要か

という三つの設問のもと進行されました。こちらも少々内容が高度であり、全てを咀嚼はできませんでしたが、理解の範囲でまとめると「研究者は研究課題に力を注ぐことが理想であるため、負担は極力最小化しつつ、しかしながら、データ公開の見返りが大きくなるような支援が必要になる。そのために、データ（データ作成者）とユーザをつなぐ、本でいうところの編集者・出版者的役割を担う人材が必要であり、研究者のもとへ赴きニーズを汲み取りつつサポートを行なっていくことが必要。」といったことが語られていたように思います。

▲パネルティスカッションの様子

コメント募集!!

“さよならDRF”コメントを募集します

皆様にご支援いただき活動して参りましたDRFは、今年度をもちまして解散の運びになりました。そこで、DRF参加機関やMLにご参加の個人の皆様からのコメントを募集します。研修・WS・MLのやりとりなど DRFとの思い出をお寄せください。いただいたコメントは月刊DRFで紹介します。

掲載する名前・所属（匿名・所属無もOK）・顔写真（匿名の方は代わりとなる画像）を添えて以下までご応募ください！

2月24日(金)締切

応募先：gekkandrf@gmail.com

かたつむりとオープンアクセスの日常 (最終回)

連載　第21回

オープンアクセスは日常になったか？

Is it still a dream?

2013年度から約4年間にわたった本連載も今号で最終回。開始当初は4年も続けられるとは思っておらず、JPCOARの設立を以って連載終了へ、という流れも予想外でした。長きに渡るお付き合い、ありがとうございました。

連載初回の記事を見ると、「OAは夢ではない！ ただの日常だ！」と意気込みを述べています。実際、その当時でも分野によってはOAはかなり進んでいて、生命医学分野では50%の論文がOA、という話もありました[1]。

その後の4年間で、ヨーロッパではHorizon 2020はじめEU単位としてのOA方針が策定され、EU各国の単位でも、公的助成の成果は2020年をめどに全部OAにしていくと方針が定まりました。アメリカはちょうど連載開始のちょっと前、2013年2月に大統領府OSTPが連邦政府機関に助成研究成果のパブリックアクセス方針策定を命じ、つい最近、対象となる全機関が方針を公表しました。すでにアメリカで連邦政府機関の方針によりOAになった論文の数は420万本以上にものぼるとか[2]。世界全体でも、2015年には全論文の3分の1が（エンバーゴ終了後の公開も含めれば）OAになっていると言われています[3]。

日本でも京大を皮切りに、大学単位でのOA方針が明示されるようになってきています。JPCOARも設立され、4年でずいぶん進んだなあ…という気もしますが、しかし、肝心の、日本の論文のOA状況は、どうなっているんでしょう？

この「日本の論文のOA状況」というのが如何に調べにくいものかは、この手の話題が出るたびに担当者は実感しているところと思いますが（苦笑）、大変大雑把な目安として、とりあえずIRDBコンテンツ分析で取得した英語・雑誌論文の年間増加数と、SCOPUSで取得した著者所属国に日本を含む論文の数（英語・雑誌掲載・原著もしくはレビュー論文に限定）とを比較してみたものが図1です。日本の研究機関所属者を著者に含む、つまり機関リポジトリのターゲットになりうる論文はだいたい、毎年80,000本以上、出版されています。一方、この4年間の機関リポジトリ新規収録論文数は年によって差がありますが、多くて10,000本弱、少なくても5,000本強、というところ。平均すると年7,400本程度でした。毎年、新たに出版される論文数に比べ、新たに機関リポジトリに登録される論文数は10分の1未満…ということで、機関リポジトリの貢献だけを見ると、日本の論文でOAになっていないものの数は増える一方…ということになってしまいます。

当然ながら実際はそんなことはなく、J-STAGE等の最初からオープンなプラットフォームで公開される論文も多いですし、PMCやarXivのような海外のセルフアーカイブの場に収録される日本の論文も多いです。実際、PMCにはだいたい毎年15,000本以上、日本の著者を含む論文が収録されています。機械的に収録される論文が多いので単純に比較するのは酷である、というのを承知の上であえて指摘すれば、日本の研究者の論文であっても、日本の機関リポジトリでOAになるものより米国のPMCでOAになるものの方が多いのが現状です（英語雑誌論文に限る）。

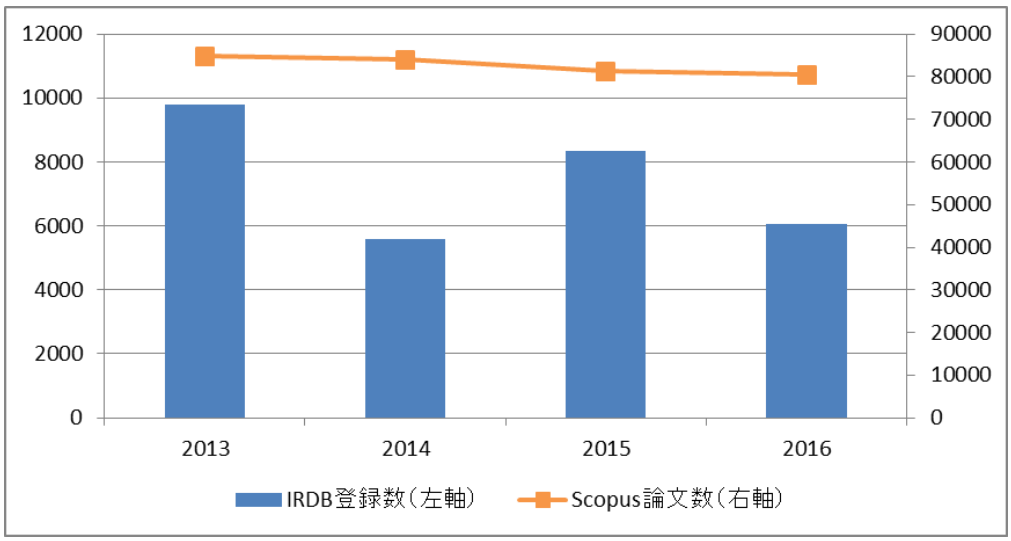

図1. IRDB登録数とScopus収録の日本の論文数の比較

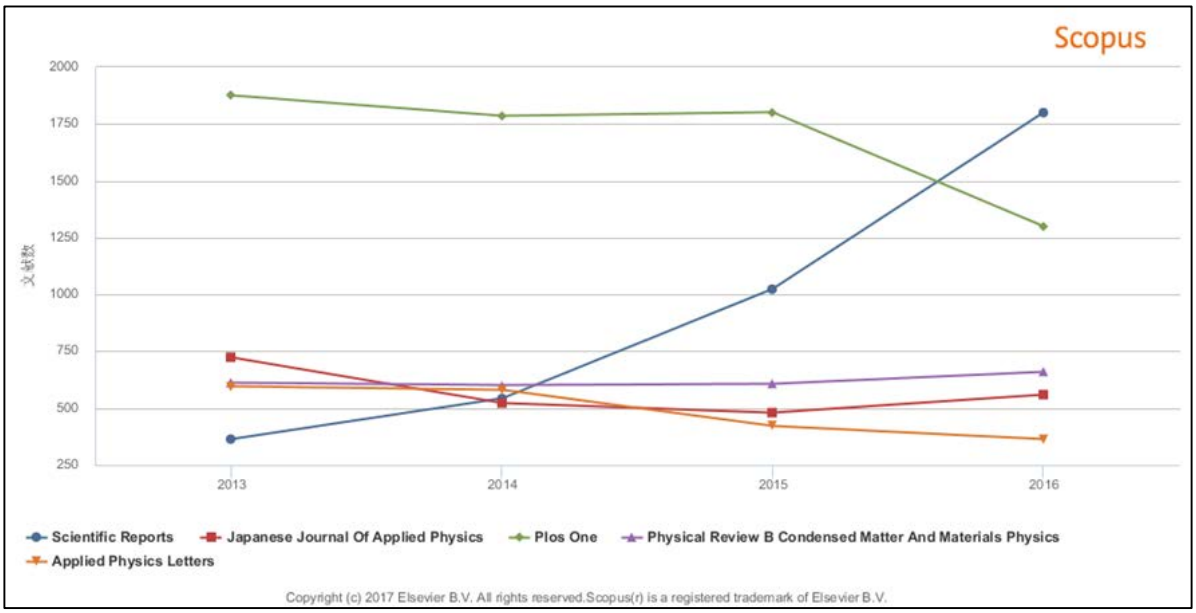

図2. 日本の研究者の論文掲載誌トップ5（Scopusより）

そしてもちろん、APCを取るようなOA雑誌に掲載される論文の数も少なくない、どころか日本の研究者が一番、論文を発表しているのはOA雑誌でもあります。図2は図1で集計したScopus論文について、掲載元雑誌トップ5の、4年間の論文数推移を見たものです。2013～2015年と第1位は元祖OAメガジャーナルPLOS ONEで、他を圧倒していました。2016年は首位の座をSpringer NatureのScientific Reportsに譲り渡していますが、2誌あわせての掲載論文数は2015年より増加しています。2016年の上位10位には他にNature Communicationsも入っています。OA雑誌への投稿は日本の研究者にとって、既に当たり前の選択肢の一つとなった…といえますが、見方によってはOA雑誌が出版社にとって当たり前のビジネスになった…ということでもあります。

OA雑誌や海外プラットフォームでのOAが目立つ一方、日本の機関リポジトリによるOAはそんなに進まなかったなあ、というのがこの4年間の傾向でした。ただ、各大学で制定されたOA方針が雑誌論文獲得に威力を発揮するのはむしろこれからでしょう。PMCにしろOA雑誌にしろ、日本の論文すべてをOA化できているわけではなく、足りない部分を補っていく役割は、やはり機関リポジトリに期待したいところです。

日本のすべての論文をOAにする。世界の状況を鑑みれば、それは高い目標や、ましてや夢などではなく、現実的な一つのゴールに過ぎないわけで、現状はちょっと出遅れた感じもありますが、これから着々とやっていきましょう。

[1] https://dx.doi.org/10.1371%2Fjournal.pone.0060925
[2] http://current.ndl.go.jp/node/33271
[3] http://current.ndl.go.jp/node/32701

佐藤　翔
同志社大学免許資格課程センター助教。
ブログ「かたつむりは電子図書館の夢をみるか」（http://d.hatena.ne.jp/min2-fly/）管理人。

■次号予告■

【レポート】SPARC Japanセミナー（2/14） 参加レポート
【レポート】北海道大学 オープンサイエンス ワークショップ （2/7）参加レポート
【 連 載 】今そこにあるオープンアクセス（最終回） ほか

月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしています。
✉ gekkandrf@gmail.com

読者アンケートにご協力ください。
http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html

Facebook
https://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation

月 刊 DRF　第 83-84 合 併 号　平 成 29 年 2 月 3 日 発 行　デ ジ タ ル リ ポ ジ ト リ 連 合
http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf/